



2001年、卒業後20年の同窓会での写真。カレッジの船着き場にて（左から2人目が筆者）

であり、何が起こつても決して他人のせいにはできない緊張感があった。日本の「みんな一緒に行動しましょう」方式しか知らない私は、すべて自分で決定しなければいけない状況に慣れるまで時間がかかった。

やっとの思いで一年が過ぎ、二年目は英語も上達し、友人も増えて生活に余裕もできた。しかし、友人との話し合いで私の考えの根拠をきかれると、自分でも整理ができず、深く議論するような話題は避けていたような気がする。ピアソン卒業後は、京

都大学で北米を中心とする国際政治を専攻し、育児のためのブランクを経て、大学院で修士課程を終えた。

## もっと話したい

時は過ぎ、一九九〇年と二〇〇一年に、カレッジで一週間の予定で行われる同窓会に家族とともに出席した。久しぶりに会う友人たちは、多少外見は変わっていたが変わらぬ笑顔で私たちを迎えてくれた。「ピアソンってこんなに楽しいところだったかしら？」というのが正直な感想だった。学生の二年間より多くのことを、学生の頃話さなかった人と話した。話したいことが後から後から出てくるとい感じだった。話したいことがあれば語学は後からついてくるといことを実感した。学生時代、私は主張したいことがなかったのだ。主張したいという熱意がないから議論を避けていたのだ。少しは成長し、同級生と肩を並べられた気がして嬉しかった。

現在、三人の子どもたちは私がピアソンで学んだ年頃になり、私自身は女子大での講師の仕事に就いて七年が過ぎた。インターネットの発達で国際化は二〇年前とは比べものにならないほど進んだ。しかし、一方で日本の英語教育が効果をあげないとい

われて久しい。私は、その理由を日本の学生には英語を使って伝えたい意見がないからであると思う。私自身、自分の考えを確立してから出席した同窓会の会話の深さは在学時より深かった。今、大学において、教える側からの一方的なものではなく、学生からの働きかけを含む双方向の授業を目指してはいるが容易ではない。仮に意見を持つていても、多くの学生は発表する必要性を感じていないのである。雑談はできて自己主張は苦手という日本人の特質は学生にも引き継がれている。今、日本の教育に必要なものは自分の意見を持つこと、そしてそれを臆することなく自信を持つて主張することであると思う。そうすれば語学はついてくるような気がしてならない。

二年間のピアソンでの生活は楽しいことばかりではなく、常に自分を試されているような日々であった。しかし、あの二年がなければ、現在の職も、世界中にいる友人との交流も、コミュニケーション能力も、ボランティアは人のためにするのではなく自分のためにするという精神も持ち得なかったと断言できる。今、当時日本にいたら気づかずにいたであろう自分の限界に気づかせてくれ、その後の人生を豊かにしてくれたUWCに心から感謝している。

# 大切なのは自己確立

— 英語を使って伝えたい意見がない日本の学生 —

UWCピアンソン・カレッジ(カナダ、一九七九—八一年)。八六年京都大学法学部卒業。九六年同大学法学研究科修士課程修了。九七年四月より現職。

武庫川女子大学文学部人間関係学科講師

田和真希

たわ まき



ピアンソン・カレッジを卒業してはや二〇年以上が経った。その間、一〇年目と二〇年目の同窓会に参加した。今、私には在学当時には持ち得なかった感情が生まれてきている。

## ▼問題は語学だけ？

一七歳でピアンソンに行くまで海外経験が皆無であった私にとって、カレッジライフは驚きと戸惑いの連続だった。不安と期待が入り混じる私を、バンクーバー空港で出迎えてくれたのは上級生であった。到着した新入生の確認と誘導はもちろんのこと、車の運転まで全て学生が行っていた。日本の高校生とはあまりにも異なり、カレッジ

の職員だと思っていたら自己紹介で一年先輩であること知り、驚いたことを覚えている。カレッジは万事がこの調子で、学生が運営を取り仕切っていた。教え切れないほどの自己紹介、奉仕活動であるサービスの選択、カリキュラムの決定、初めての四人部屋での生活の緊張等、お祭り騒ぎの一カ月が過ぎ、周りを見渡してみると、私はカレッジの生徒の自主運営からすっかり取り残されていることに気がついた。日本では自分を中心に世界が回っているかと勘違いができるほど、私の生活は思いのままであった。それがピアンソンでは、私は英語のわからない手間のかかる人間になってしまったのである。当時は語学の問題さえ解決すれば、生

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校生二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三七〇名以上の卒業生を輩出している。

活は楽しくなると思っていたが、問題は語学だけではなかったのである。

問題は、まず自分の意見を持たない性格にあった。漠然とした考えは持っていない、根拠を述べながら意見としてまとめて主張する能力がなかったのである。自己主張すると変人扱いされるという、日本の典型的な高校生の発想しか持たなかった私には、時事問題から日常の些細なことについても、延々と議論する友人が、みんなとても大人に見えた。また、日本では高校生として保護されていた私は、自分のことだけで精一杯であり、困っている人を助けるというボランティア精神は皆無であった。それにひきかえ、カレッジの友人たちは、自分のことをやめてでも私の英語につきあい、休みのたびに実家に招待してくれ、私が疎外感を持たないよう気をつけてくれた。また、サービス活動にも嬉々として取り組んでいた。さらに、カレッジの学生による自主運営は生徒の責任の上に成り立つもの